

月例研究会（2005年6月29日）

無償労働の貨幣評価の経過と現状—英国国家統計局の試算を中心に

橋本美由紀

無償労働の貨幣評価については既に国内外の文献でさまざまに語られているが、今回の月例研究会では、あらためて国内外の経過を概観し、特に英国国家統計局の試算を中心に現状とそこに見られる課題を検討した。

本報告での無償労働とは、賃金・給与が支払われることによって所得を形成するなど貨幣や現物収入を獲得する有償労働に対して、家庭で行われる賃金のない労働のことである。ここには無償労働を有償労働との区分においてどのように捉えるかという問題があるが、本報告では深く立ち入らずに、通説とされている「家事・育児・介護やボランティア活動」として捉えた。

当初はこの無償労働の担い手の多くが女性であることを背景に、家事労働に限定した貨幣評価が行われていた。しかし、国際的女性運動の高まりから、人々の生活における無償労働全般のとりあげへと進んでいった。特に1990年代以降、この評価のための有力なデータとして生活時間調査が先進国を中心として行われるようになり、論議と実際の算定は盛んになっている。さらに93SNAの生産境界を補完する概念、サテライト勘定を世帯生産に適用して世帯サテライト勘定を構想し、その中における無償労働を評

価していく動きへと発展した。

貨幣評価方法は、大きくは、投入した労働時間に注目するインプット法とその産出数量に注目するアウトプット法に分けられる。インプット法の研究・推計は生活時間研究の隆盛とともに活発であったが、アウトプット法の研究については、実際の推計よりもむしろ理論的なものが多かった。しかし、最近、英国国家統計局（ONS）がアウトプット法による無償労働の貨幣評価を公表した（ONS, 2004）。この推計及びその方法は今後のアウトプット法の研究に示唆を与えると考える。さらに、日本国内では無償労働の貨幣評価をインプット法では推計しているが、アウトプット法での推計は行われていない。そこでONSの試算を検討することは、アウトプット法による日本の無償労働の貨幣評価を検討していく上でも有意義であると考えた。

そこで報告は次の通りとなった。第1節で無償労働の貨幣評価の経過と評価方法について説明し、第2節でインプット法とアウトプット法の事例としてそれぞれ日本の経済企画庁の推計とフィンランド統計局の研究を紹介し、第3節でONSによるアウトプット法での無償労働の貨幣評価を紹介・検討した。

後半の質問から得た課題としては、無償労働の貨幣評価について国内外の論議をさらに深く追求し、その出発点を見極め、歴史を整理すること、またこれまでも海外の議論をいくつか紹介してはいるのだが、無償労働の貨幣評価と政策との結びつきを明確に示すことがテクニカルな問題を示す前に必要ということである。

（はしもと・みゆき 法政大学大学院社会科学研究所
博士後期課程、法政大学大原社会問題研究所兼任研
究員）